

文科省に聞く!

大学で学ぶ学生の声を大切にしたい

——国が全国規模の調査を実施する理由は?

「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」で示された“学修者本位の教育への転換”が背景にあります。全国の学生の意識、実態を把握、公表することで、各大学に教育改善を促すことが大きな目的です。同時に、大学がいまだに偏差値偏重の尺度で社会から判断されていることへの問題意識もあります。社会の意識を変えるには、各大学における学生の学修成果、大学全体の教育成果に関心を持ってもらうことが欠かせません。また、高校生が偏差値だけで大学を判断し、各大学の特徴に目を向けていなければ、入学後の成長は見込めず、“学修者本位の教育”の実現は難しいでしょう。その意味でも、国が共通の質問項目で全国的な調査を行い、結果をわかりやすい形で社会に広く発信することが必要だと言えるでしょう。

一部ではこれが新たな序列化につながるのではという懸念の声もありますが、むしろ単一の指標で大学の教育力を表すことが困難な中、大学はさまざまな視点で情報を発信していくことが重要です。各大学には、それぞれにミッションがあるはずですから、必ずしもレーダーチャートで正五角形になることはないのではないのでしょうか。その凹凸こそ教育の特色として示し、その高低の理由と共に発信していただきたい。そのため、次回調査では全国学生調査の自学のデータを学外に公表することも可能にする予定です。

静岡県の大学・教育機関で構成する「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」では、調査に参加した4大学の合計値、平均値を集計し、全国の中小規模私立大学の数値と比較するなどして、地域の大学の課題の把握に活用しています。こうした取り組みがさらに増えることを期待しています。

「全国学生調査」の狙いは? 学生参加型の質保証の実現です

高等教育局 高等教育企画課
高等教育政策室
課長補佐 *取材当時



奥井雅博

おくいまさひろ ●1999年国立大学に入職後、2002年から文部科学省へ。主に高等教育行政に従事。2019年に高等教育企画課で中教審や全国学生調査を担当。2021年から専門教育課課長補佐。

調査への回答そのものが教育機会に

——第2回試行実施の変更点は?

「学生が調査を通じて、学生生活をより充実したものとする」ことを目的に加えました。この調査を、学生の有効な振り返りの機会にしてほしいと考え、質問項目にも「答えのない問題を考え抜く力」や「デザイン力」など、大学時代に身に付けるべき力をキーワードとして意図的に入れ込んでいます。また、第1回試行実施の自由記述欄で寄せられた学生の声も反映させており、大学教育に対する学生自身の「気付き」を促す学生調査を通して、“学生参加型”の質保証をめざしていきます。

また、前は3年生を対象としましたが、教育成果を把握するなら最終学年で実施すべきだという指摘があり、第2回は2年生と4年生に変更する予定です。質問項目は10分以内に回答できる数を考慮して、50問に増やす予定です。コロナ禍を受けて学生の状況がどう変化したのかを把握するための質問も検討中です。

第1回の回答率は3割程度で、これをいかに上げていくかが課題です。調査の目的を学生に理解してもらうことが必要でしょう。率直な意見を吸い上げるためにも匿名性は維持していきます。また第1回目に関するメディアの取り上げ方が学修時間のことに終始したことから、社会への発信のしかたも検討事項です。第2回の終了後は、第3回試行実施を予定しており、その結果を基に本格実施への移行を進める予定です。今後さらに多くの学生に参加してもらえる調査にしていきたいです。

第1回、2回の実施概要まとめ

	1回目	2回目(予定) *赤字は変更点
目的	①各大学の教育改善 ②社会への情報公表 ③国の基礎資料	①②③に加え、④調査を通じて学生一人ひとりが学びを振り返り今後の学修や大学生活をより充実したものにする
調査対象	参加意向のあった4年制大学の3年生	参加意向のあった4年制大学の2年生、および最終学年短大の最終学年
実施方法・時期	匿名によるWeb調査/11月	匿名によるWeb調査/11月
質問項目	選択式36問と自由記述2問	選択式50問程度と自由記述2問程度
公表方法	全体・設置者・学部規模・学部分野別集計とクロス集計結果のみ	全体・設置者・学部規模・学部分野別集計とクロス集計結果のみ
自学の結果取扱	学内での活用にとどめる	学内での活用のほか、自主的な公表を可能にする